

## 座談会



(司会) まずは、今回、大賞、奨励賞を受賞されたということで、周りの方々の反応なども伺いたいと思うのですが、石坂産業株式会社様はいろいろな取組みでこれまでも賞を受賞してこられました。おもてなし大賞をとっていかがでしたか

(石坂氏) そうですね。父の代からずっと三芳町で業を営んでおりますので、父が感激してしまして、こういう賞をいただいて本当に恐縮なんですけれども、感謝、感謝の気持ちでいっぱいでございます。

また、工場見学に来られるお客様からも、石坂産業さん、「やっぱりね、さすがですね」という声を非常に多くいただくんですけれども、その言葉で、モチベーションも上がるのですが、これからやっぱりおもてなしをどんどん進化しなくてはいけないと思いますので、お客様が幸せになっていただけるように努めてまいりたいと思います。

(司会) 続きまして、オープンガーデン、横瀬様はいかがですか

(田端氏) そうですね。この賞をいただいて、かなり喜んでいただいた方と、逆にこのオープンガーデンが何でおもてなし大賞をもらえたのかという方と両極端でしたね。自分たちがおもてなしをしているんだというのを意識していない人もいたのかなと、改めて思いました。

(司会) 島田先生がいらっしゃいますから、これからのお時間、先生中心に座談会ということでお話を進めてぜひいただきたいと思うのですが、先生から受賞の皆様方に何かございますか。

(島田氏) 今日は特別賞を含めて5つの団体の方に話してもらって、やっぱり特徴ってあつ

たでしょう。

何が特徴かという、おもてなしって一番大事なのは何かという、おもてなしって自分が笑顔でおもてなししているとか、ちゃんと挨拶しているんだとか、自分がやっていることが大事なんじゃないんですよ。相手がおもてなししてくれていると思って、初めておもてなしは成り立つんだ。だから、自分が笑っているつもりでも顔が緊張している人もいるわけ、それから挨拶しているつもりでも頭が下がっていない人いるんですよ。例えば高校生のアルバイトさんが例えばファミレスでアルバイト、家でお父さんにおはようも言わないような高校生が突然アルバイトをやってね、お客さんに頭なんて下げられない。でも本人は下げているつもりなんですよ。でも客は、本人が下げているつもりだからいいというのではだめなんです。やっぱりお客様は、僕のためにこの人は笑顔を出してくれた、挨拶してくれたって、初めてそこでおもてなしが成立するの。今日の5チームは、みんなきちっとそれをわかった上でぴしっとやっていた。おもてなしというのは、ここが命だ。だから、やっている側がやっているよということは全然意味がない。そこに座ってみせていただいたが、この人は本当に多分そこへ行ったらおもてなしをしてもらえるんだろうなということを見せてくれた5チームだったなと思う、そういう印象を受けました。

だから、多分お二人にお聞きするのは、まずその辺から、やっぱりおもてなしというのは社員教育でやるんだけど、やったからいいわけではないの。本当にお客様が来て、あああなたのところはすばらしいねと言って初めて社員教育が生きる、どういうふうに社員教育しているの。

(石坂氏) まず、最初に挨拶から始めようと。弊社は挨拶を大事にしようというところからまずスタートしました。そして、分別作業している作業員も工場見学通路にお客様が通られると、手はとめません。コンベアが流れていて、選別はずっと行っていますが、ちゃんとお客様の目を見て、笑顔で挨拶をすると、そういったことはやっぱりお客様がその場で褒めてくださるんですね。そうしますと、ナビゲーターの者が彼らにちゃんとフィードバックしますから、きょう来られたお客様は、本当にあなたのことを褒めていたよと、そういったことをフィードバックすることによって、俄然やる気が出るというような中で、お客様に教育されていると。私たちが幾ら挨拶しろ、挨拶しろと、年中言ったところで、やっぱりしない者もいますから、ただそうではなくて褒めてやっぱり伸ばすといったところが一番大事なんじゃないかなと思います。

(田端氏) オープンガーデン横瀬は会社ではないので、組織立ってはいますけれども、そうい

ったことは一切ないわけですね。このような中で横瀬のオープンガーデンは、ほかからもいいねという話をよく聞くわけですが、さっき言っていましたフィードバックというのがとても大事で、お客さんの声がこういうことがあったよというのをやはり事務局からオープンガーデンには伝えるようにしています。その中で特に思っているのは、やはり会員さんが自ら楽しんでいて、楽しんでいるから観光客にも必然的に優しくなって、優しいから観光客の人は優しくされたよという話になり、それをうちがまた伝えることで、いい循環ができていると思います。教育ですとか、そういったことは一切できませんし、ましてや年齢的には私よりも大先輩の方が多いので、その辺の中ではやはり自分たちが楽しんでいるというのが一つのキーワードになっているのかなと思っています。

(島田氏) 今度は2つ目の共通項ね、みんなに。やっぱり先ほど田端さんがおっしゃったように、自分たちやっている人間は町のためなんだと思っていないんだけど、実質、何が言えるかという、町自体が機能しているんですよ。やっぱり町って、金太郎あめみたく、どこの町も同じようじゃ行ってもつまらないじゃないですか。やっぱりこの町ってこうだよねという個性とか、特徴がないと、やっぱり訪ねていってもおもしろくないじゃないですか。今全国の観光地で人気の町って、やっぱりその町に特徴というか、個性があるところなんですよ。みんなそれぞれ自分の施設を通しながら、その場に個性を出そうとして頑張っていらっしゃる。

観光というのは、観光客に寄与するのが観光と思われがちだけれども、本来、それを通して自分の町にはね返ってきて、先ほど冒頭でもお話ししたんですけれども、やはり住民たちがいい町に住んでいるなと思えて、初めて観光というのが生きてくるんだろうと。



(石坂氏) 私どもの会社は、産業廃棄物のリサイクルをするプラントですので、まず第一に迷惑施設と言われる。石坂産業汚いでしょう、臭いでしょう、暗いでしょう、そのように言われながら来ましたので、そんなにうち悪い仕事しているのって、父に話に行ったことがあったんです。それで、私がこの会社に入って手伝うようになってからですね、ある一本の電話がかかってきまして、うちの社員さんのお母さんからの電話だったんですが、うちの子供に手選別なんかさせてどういうつもりという電話がかかってきたんです。「ええ？」と私は思ったんですよ、そういう仕事、当たり前の仕事だと思っていましたから。ごみにさわらせるなんてとんでもないと、本当にひどい、イメージが悪くてですね、これはもう非常に若いながらも私はショックを受けました。ただ、もうここで負けるわけにいかないと、ならばいい会社にしなくてはいけない、今はそれをずっと一直線に走ってきている状態の途中の段階なので、やっぱりあそこで業を営ませていただいている三芳町さんというか、埼玉県の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいでございます。まだ今その途中なので、これからまだまだ恩返しができることが夢の段階ですけれども、まだまだあると思いますので、今後ともよろしくお願ひしますという気持ちです。

(田端氏) 先ほどちょっと先生がおっしゃっていただいた健康寿命、これはやはり横瀬町でも健康寿命を延ばそうということで考えておりました、それはやはり生きがいつくりにつながってくるんじゃないかなと。その生きがいつくりの一つがお花が好きな人が人と触れ合うためのツールとして使ってもらっているという状態になっているんじゃないかなということで、10年、20年後の先というのは、なかなか明るいイメージはもしかしたらないのかもしれませんが、ただ今皆さんがやっている活動は続けていくことで、生きがいつくりの健康寿命が延びて、さらには観光客がふえることで人口が減った分だけ、先ほど先生がおっしゃっていましたが、消費活動がふえれば、たとえ人口が減ったとしても、それを補うだけの外からの交流人口をふやせるんじゃないかなと、ちょっと希望的な感想が多いですけれども、そのように思っています。

(島田氏) 観光の問題の中で、一番大事な3番目というのは何かというと、市民に支持されない観光とか観光地はだめなんですよ。それこそ先ほど冒頭で話したように、タクシーの運転手さんがあそこはいいところだねと言ってくれる。俺も好きなんだよと言ってくれる、町を、歩いている主婦、おばさんにどここのレストラン、こういうのを食べにこの町に来たの、ああそこだよ、おいしいよって、市民が褒めてくれたり、いいところねと言ってもらえない限りだめなんで、観光地が潤って、市や町や村が寂れていったんじゃ意味がない。やっぱりその

自分たちの施設もにぎわうんだけど、町もやっぱり潤うというのが観光のやはり目的の一つだろうと思うんですよ。

そのために例えば九州、鹿児島県霧島市にクラシックだけの大きなコンサートホールがあるんですよ。これが黒字なんです。霧島市というのは鹿児島市から1時間、鹿児島空港から20分か30分のところなんですけれども、もう完全に山の中です。霧島のクラシックのコンサートホールが黒字なんです。でもその理由が何かというと、市民に愛されているから。どうということかということ、そこで霧島国際音楽祭とか世界的な音楽祭をやるんですよ。やったときに世界中の一流のピアニストばかり、来る、泊まる、いいお店があれば当然快適なだけでなく、さてやろう、練習しようとする、コンサートホールにピアノが1台しかない。そこへ5人の世界的なピアニストが来たらどうすると思いますか。簡単なんです。町にある家のピアノを借りるしかないんですよ。そうすると市民がみんな来ているミュージシャンに家の楽器、いろいろなものを提供するんですよ。もちろん質はそんなに高くはないんだけど、練習にはなる。その小学生のお嬢さんが横で見ているんです。自分が弾いているピアノの音がこんな音になると驚いて頑張ろうと思うから、霧島の小学校、中学校、全国コンクールをやる、とトップのほうに入っている。私たちの自分の持っているピアノでこんな音が出るんだ。そういう人が今度はコンサートホールでやるから親戚から友達からみんなに電話する。私のピアノで、今こういう世界的な人が来ているんで、聞きに来いと、だからいっぱいになって黒字なんですよ。

埼玉ではクラシックをやって黒字なんてない。だから、いろいろな有名タレントの歌を入れたり何かしているのに、クラシックだけです。

(田端氏) 私も大したことやっていないんですが、隣近所でやっている人とやっていない人の差があります。もちろん、やっている人のところは庭をオープンしているので、どうぞ御自由にお入りくださいと言っているんですけども、何となく並びの庭も普通にお客さんが入ってきてしまったりとか、やはり多分そういうことでは不快な思いをされた方とかも大勢いらっしゃるのかなと思います。

でもクレームといいますか、苦情というのは町にほとんど実はなくて、これは何でなのかなと思ったんですね。例えば花好きの人が自分の庭だけきれいにしていると、何となくお隣の庭もちょっと草が出ていると、きれいにしてあげようかなみたいなそんな気分になると、私は思わないほうですが、多分やっている方は思うんだと思うんですよ。

もう一つは、お客さんが今まで結構、これは町側の私のほうの問題として、看板なりパンフ

レットが余り充実をしていないというんですかね。なかなか看板を出しているというのも嫌だし、地図を細かくといっても大きくしなければならない。その間で観光客が道迷いをする方がところどころにいらっしゃるんですけれども、オープンガーデンの看板を掲げているだけで、お客さんがすみません、ここへ行きたいんですけどもといったことで、お客さんが入って、これはどこどこだよ、案内するよ。ちょっと先ほどさせてもらいましたけれども、ちょっと遠いから車で送って行ってあげるよ。あそこの料理がおいしいからこれ食べに行ってみたらとか、そういったことでお客様が迷っていて、もしかしたら地域の住民たちも、見ず知らずの人がうるちょろしているなという人も、オープンガーデンの会員さんの人が親切に対応しているのを見ていて、そういったことを踏まえて全般的に地域の関係がうまく今成り立っているんじゃないかなと思います。

(石坂氏) 弊社はですね、かなり地域住民の方と密着しておりますので、「寄り道の駅」という地産地消のうどん屋さん、炊き込みご飯とかもあるんですけれども、そういったお店があります。農家さんが一生懸命つくった野菜を買い取ってですね、その材料を使ってうどんなり炊き込みご飯を提供させていただいている。それはギャラリー喫茶になっていまして、趣味で陶芸やっているのよとか、手編みしているのよとか、そういった絵画を描かれている住民の方もいらっしゃいますので、その方々にギャラリーを使っていただいて、展示販売をするだとか、そういったことの活動をしています。

(島田氏) そこでもう一つ、大事なことをお聞きしたいんですけれども、観光というのは、今の人たちが頑張るだけではなくて、次世代、その次の世代も自分の町、自分の県について愛県心とか、愛町心とかを持ってもらうことによって、観光が維持され、町の魅力が維持される。いい町に住んでいると思ってくれるという中で、小学生や中学生とかいう人も、座っているだけじゃなくて、社会科見学で行ったりして、例えば川越だったら川越の小学校、中学校の生徒が掃除と、町をきれいにするというのはこんなに大事だから、俺らもやるよといって、お二人の後ろについてやるよとか、熊谷でああいう人たちで人様に笑顔を出すことのすばらしさというのをやるんだったら、自分たちも小学校、中学校のときああいうテキストがホテルであるんだというのでやるよとか、お花というなら小学生や中学生も我々も学校を花で埋めようとか。

それから、ワンガリ・マータイさんってノーベル平和賞をとったケニアの方で、僕は彼女の本をつくったからよく知っているんですけれども、すばらしい方、この人が国連のスピーチで「MOTTA INAI」という日本語を使ったんですよ。それでもったいないが世界語になった。それも一番日本の中できちっとやっていたらっしゃるのが石坂さんね。本人は言わないんだ

から、さっき説明したのはマータイさんだというわからない人はわからないんだから。こんな素晴らしいことをやっているんですよ。あの3Rというのもマータイさんの思想の中で、ほとんどの日本でももったいない産業っていっぱいあるんだけれども、みんなまやかしの。ところが、みんなって言っちゃいけない。石坂さんをなぜ審査員たちが褒めたかというのは、本当にやっているから。でもそれは地方、ほかから来る生徒や何かに教えるだけじゃなくて、三芳町に学校があったら、小学生や中学生が一番手本として、うちのああいう会社があるから見て、うちでもやるんだとか、学校でもやろうよといって、初めてそれが町に生きる循環だと思うんですけれども、そういう地元の小・中学校対策という、それがその人たちがやがて大人になって自分のふるさとを振り返ったときに、うちはいいい町だよねって、帰りたいよね、うちの町をよくしようよという考えにつながってくる、これがなければ何かビジネス、ビジネスで観光客を呼ぼうよというだけの断片的なものは観光でないと思うんですけれども、どうですか、小学生、地元の人たちにどういうふうにアプローチをしているんでしょうか。

(石坂氏) 弊社は、もう完全に社会科見学の一環として、環境学習に取り入れていただいていますので、小型バスで小学校4年生ぐらいから環境学習というか、環境の勉強をし出すんですね。120名くらいどっと来まして、そこでも地元のボランティアのおじいさんだったりとかおばあさんだったり、トンボの先生だったりとか、草笛の先生だったりとか、皆さんそれぞれ専門の知識がございますので、その方にも教えていただいています。

それにはあと私たちスタッフが絶対的に安全面を確保した上でのスケジュールを確保しているので、予約制の形をとらせていただいています。

(田端氏) 最初にちょっと写真でもお見せしましたが、これ実は本当に最近の横瀬でして、中学生のボランティアさんが公園の一角をきれいにさせていただいて、そこにはもちろんオープンガーデンの会員さんも、実は保護者だったりするんですけれども、親も一緒にそこに庭づくりをしてもらっています。

先ほど先生がディズニーランドのアルバイトの話がされましたがその子は、ディズニーランドの教育でそういう対応をとったわけではなくて、多分もう小さなころから周りの環境でそういう育て方をされてきた子なんだろうなと思います。本当に相手の立場に立ってというようなことを本当にそういう小さなうちからしてきた子なんだろうなという話を思ったので、本当に若いころ、小さいころからのおもてなし教育という部分については本当に大事なかなと。学校で花植えとかを結構しているんですけれども、今提案しているのは、学校の中に自分たちの花を教室の前に植えているだけなんですけれども、観光客が歩いているときに声をかけてもらった

りというのもありかなと。ちょっと場所を変えるだけでも、またおもてなし力の低年齢化がそういう教育が生きれば、もっとよくなるのかななんてちょっと頭をよぎりました。

(島田氏) おもてなし大賞を受賞した5人に共通することなんですけれども、景観戦術をしっかりやっているんですね。環境をどうやって美しく守る、これって観光の中ですごい大事なことなんです。

例えば農地の休耕地をそのままにしておくと自然が荒れるでしょう。自然が荒れるときというのは、手を加えない自然が美しいのはとんでもない話で、自然って手を加えないと一番みっともない荒れ方になって、自然破壊になる。だから、手を加えて美しくするというのは、必要だと。これはすごいお金がかかるでしょう。これでもうかるなんて一つもない。でもいい観光地、いい町、いいいろいろな施設は、それをあえてやっているんですね。川越だって頑張っている、ホテルもやられている、全部きょうのところでやられている。花もそうですよね。あれだってある意味では環境を守るためにすばらしい効果が実はある。

まして石坂さんはワングリ・マータイさんというノーベル平和賞をとった女性の思想をきちんと受け継いで環境を守って、しかも何か林のところは建物を建てちゃいけない、それを守るだけの努力をずっとなさっているというのは大変だと思うんですけれども、そのあたり自分たちが環境を守るためにやっていることを教えていただきたい。

(石坂氏) 弊社は、東京ドームの大体3.5個分敷地がございます。その中の2割だけがリサイクルをするプラントでして、あとの8割がクヌギの森という森になっているんですが、やはりどうしても地権者さんたちがお年を召されるとなかなか森の管理ができにくい、できないという状態になってきますので、そうするとちょっと石坂さんどうにかしてよと、土どめしてくれないかという形になるんですね。そういう話をいただくんですけれども、またそうこうしていくうちにどんどん管理面積がふえていくような形にはなっていくんですけれども、森を保全するだけで、年間人件費合わせて6,000万ぐらいをかけていますが、でもそれは絶対的に将来的に意味があることで、木ときれいな水があれば人が集まると、本当にどこに行っても環境ばかなので、木と水だけは大事にしてくださいという話はしています。これは絶対的に人が集まる、動物が集まる要素であり、また土を豊かにするとやはりいい野菜がとれると、生きることには必ず必要なことだよという教育はしています。

(田端氏) まず、花の場合は道路から家には接していますので、花を植えたときに、もちろん自然もそうですけれども、やはりごみだとか、それは皆さんに基本的に拾っていただきます。先ほども大きな問題として、環境保全の例えばうちの町は7割以上が山なので、実は先

ほど先生がおっしゃったとおり、何も手をつけなければ山は自然の状態なのかといたら、やはり自然ではなくて、土砂災害になりやすかったりとか、そういったことも問題が出る。そういう中ではオープンガーデンだけではなくて、今度はまた別の地元のボランティアさんで、里山再生事業、竹やぶとかですね、竹を切って、そこにもみじを植えたりしようと。これの裏づけとしては、やはり秩父、横瀬に訪れた人のお客様のニーズ、何を求めてきましたか、近い自然だという人が大半を占めてくる。必ず自然という言葉が入ってくるので、やはり自然を、ただ手を入れるということよりかは、お客さんに感動してもらって自然をつくり出すということがやはり観光地としてやっていかなければいけない。

石坂産業さんも長い年月をかけて今やっているんだと思うんですけども、苗木を植えれば、すぐきれいなもみじになるかと思ったらもちろんならない話で、10年、20年後を見据えて、いずれきれいなもみじの町だったり、花の横瀬の町になっていけばいいなということで考えております。

(島田氏) お二人も含めてあと3社、計5社の方々にいろいろ自分たちのやっていることを全部紹介していただきましたがすばらしいですね。これだけ努力なさっているのが埼玉県にある。もちろん、5社以外だっていっぱいあるんですね。

ところが大事なことは何かというと、最初に言いました商品で客をつくり、サービスで客をなくす。今日はサービスで客をなくさない方法というおもてなしの話を冒頭させていただいたのですが、商品で客をつくるということも大事なことです。なぜかというと、そこへ来てもらった後でおもてなしができるんであって、東京銀座四丁目でおもてなし、おもてなしと言ったって来てくれないんですよ。川越は何がいいの、行ってみたら、おもてなしの町だったねということとは、いい商品がみんなあって、いい町がいっぱいあって魅力があるんだったら、人に知らせるという努力をして、初めて自分たちのいい商品は商品化される。どんなにデザイナーが良い洋服をつくったって、誰も知らなかったらだめで、布を加工するのに、あのデザイナーがつくったと思うから、よい洋服に変わっていく。観光も同じ、どんなに皆さんが頑張っているものをつくったところで、それは知らなかったら全然意味がないということで、本来5社にお聞きするのがいいんだろうけれども、知らせる努力、例えば全国の人でも外国人でもいいし、それから首都圏の人でもいいんだけど、どういう努力をしていらっしゃるか、それによっておもてなしも生きてくるという感じがするんですけども。

(石坂氏) 知らせる努力、ホームページをやはり格好よくしたりとか、すごくいいことをうたったりする。そういう格好つけるようなこともすごく大事だと思うんですけども、やはり

うちはロコミでここまで広がってきているのが事実なんですね。そのロコミが結構皆さんオーバーに言うものですから、もう石坂産業さん、あそこの会社すごいから見に行っって、そういう言葉をいただくんですけれども、非常に皆さんが期待値を上げてこられるので、冷や冷やなんですけれども、期待値を上げたお客様にそういうことを対応するだけでは満足だと感動につながりませんので、感動していただくためには、やはりどうしたらいいのかと、日々そういったことを考えながら対応させていただいているんですけれども、やはり何かいい広報があったら、むしろ教えていただきたいんですけれども。

(田端氏) 横瀬の場合はですね、やはりロコミが一番で、お花好きの方はお花好き同士のネットワークができて、違う市町村でのお花好き、先ほど視察とか言っていましたけれども、視察に行ったりとか、視察に来られたりとか、富山の方から来てくれる方なども結構多くてですね、そういったことではかなりロコミの部分は多いのかなと思っています。

実は、オープンガーデンとは直接関係ないのですが、氷の花を、柱を氷柱でつららを実は今やっているんですけれども、実はですね、おもてなしレディによる甘酒または紅茶を1杯無料サービスというのをやっているんですね。

ここにおもてなしレディという新しいキーワードが出てくるわけなんですけれども、これは地域のおばちゃんが出て、1回、入園してもらえれば、入園料が200円かかるんですけれども、甘酒を出す。何しろ寒いところなんで、多少おいしくない甘酒でもおいしく感じるんですね。おもてなしという言葉があるだけで、実はよかったよという反応がすごいあるんですよ。イコール、横瀬町っておもてなしがいいよねというロコミも広がってきて、オープンガーデンだけじゃなくて、オープンガーデンがない時期にお客さん呼び込むためにつららをやるわけなんですけれども、年間を通じて横瀬町の中でオープンガーデンのおもてなしをしたり、氷の担当者のおもてなしレディがおもてなしをしたり、何しろ横瀬町っておもてなしがいいよね、秩父地域のもてなしがあるよねというロコミがどんどん広がってくれば、本当にこちらから改めて何かなくてもいいのかなと。実際にこの氷柱も2万2,000人お越しいただいています、掛ける200円と考えると、そこそこのあれになるわけなんですけれども、本当に町を挙げて今おもてなしというのは、皆さんから御支持いただきながら、御指導いただきながら、これからはいろいろなところで使っていきたいキーワード、それがいつも根づいているような町にしていきたいなと思っています。



(島田氏) この知らせる機会は大変だと思うんですよ。例えばここに100人の方がいらしゃる。この下をおりて左に行ったところに、実は昨日、おいしいラーメン屋ができたんですよと言ったとします。1カ月後にどのぐらい知っているかと、やはりただ村社会の情報でしかないんですよ、口コミというのは。口コミというのは、マスコミとか、地域メディアとかをうまく使った上でSNS、ショートメール、ツイッターだとかフェイスブックが生きてくるんですよ。

観光をやる上で一番忘れがちなのは、日本でいいものさえつくれば、黙っていたって客が来るんだよという何か武士は黙ってとか、フランス人だとおしゃべりが金になるんだけど、日本は自分から、僕みたいにべらべらしゃべってやったら魅力のない男、これはもう時代が違って情報化社会でインターネットでもサイトが人口が100倍も200倍もあるような何億サイトがある中で、うちがいいんだからわかると思ったら、悪いところをもっと宣伝とかそっちのほうでやる。いいところ来ないのが多い。

だから、いいところほど実はもっともっといろいろな形でPRしていってもらえば、来てももらえる。来てもらえればきょうのテーマであるおもてなしが評価されて、埼玉県すごいおもてなしをするじゃないかというのがわかってくるという感じで、僕の願いは、知らせる努力という、またはそういうものを県とか町が育てていかないといけない。役場に行って、やりましようよ、この町でという、その根回し、それを今度はじゃ全国に知らせる、または外国に知らせる。もちろん、口コミもその中で生きてくる。埼玉県だったらもっとこの魅力が全国につながる、もっと郷土愛がふえる感じがするんですけども、勝手なことを言いました。

じゃ、最後にお二人に、大変な点、思いのたけを皆様に語っていただいたらどうですか。

(石坂氏) ちょっと補足なんですけれども、まだテレビのお題は言えないんですけども、TBS関連のもので取材が2件決まっております、そのうちテレビに出れそうな感じでござ

います。もしそういったことの情報フェイスブック、石坂靖子で検索してください。すぐそこで情報を発信していきますので、よろしく願いいたします。

(田端氏) そうですね。今回私も一つの研修を受ける側の立場として、本当にいろいろなおもてなしの方法があるんだなと思いました。もちろん、石坂産業さん、本当にすごいなと思って、まねしようと思っててもできない。もちろん、やるのが全然違うので、石坂産業さんのおもてなしの方法と横瀬町のオープンガーデンの方法とそれからきょう御紹介いただいた3社の方法と、いわばそれぞれ趣があって、おもしろみがあって、やり方がそれぞれ、皆さん原点があって、結構楽しんでやっているようなそういう感じがしました。

本当に今日はとても勉強になりました。

(司会) ありがとうございます。きょうの先生のお話、皆様のお話を伺っていると、いろいろ実はもう知らなければいけない、また知っていてもここで満足しないでもっともっと発信して、魅力をさらにつくる努力もしなければいけないという、知っていただいたことによって、いろいろな人たちが知ってくださった、今も皆様がされている心からのおもてなしを願わくば町全体を、全ての人がおもてなしの役割を担って、ぜひウェルカムとおもてなしをしていただく。そうしたら埼玉県は物すごい埼玉に、すばらしい人間がたくさんいて、海外からも国内からもたくさん集まって、私は、先生、埼玉に来れば健康になれる、これは私も人に会うたびに多分発信していくと思います。何で健康寿命が一番高い。埼玉だとおばあちゃんもっと長生きできるよとか、あそこに泊まったら何かもっともっと元気になるよとか、そんなことを言う、ロコミ的なことですがけれども、やっていってよろしいわけですね。

(島田氏) それだって実は観光の一つなんです。スポーツツーリズムね。それからグルメツーリズムね。ほかがみんなB級でやっているけれども、埼玉はA級でしょう。ホテルは地産地消で頑張っていらっしゃる。A級グルメでしょう。

キツラノダイエットとって、カナダのバンクーバーにキツラノという中心街に近いところに町がある。そこは100マイルダイエットとって、100マイル、160キロ圏内のものを出すということで有名だって、世界中の地産地消、健康、ダイエット食のメッカになった。埼玉県、東京なんて自給率2%ですから、食料自給率、埼玉はいっぱいとれるでしょう。山もある。

僕はね、これまた最後蛇足ですみません。埼玉県は今、羽田から川伝いに船で客を呼ばばいいんですよ。だってスカイツリーだって川の横にあるんだ。お台場だってそう、羽田だってそうなんだから、震災が起きたって交通網は壊れないし、海も川も近いでしょう。あらゆるものがこの財産で、だから資源がいっぱい眠っているんだから、これからみんなばかな発想で

す。ばかと言われていいんです。そういうのは世界中にいっぱいいるんですよ。空港着くとそこから船でばっと入っていく。例えばそういうようなものとか、いっぱいアイデアを出して考えていけば、埼玉県って、もうトップクラスに魅力が出る。

（司会）おもてなし大賞は、これから3回目、10年、何十年と続いていく、始まったばかりの取り組みなんですね。今からこうやって皆様とこんなに一生懸命知恵を絞り、また力を尽くしてくださって、またすてきなアイデアを未来にどんどん語っていけるように実現していったら、ぜひとも皆様、まだ2回目、今年度3回目になりますね。ぜひともまた皆様参加していただいて、貴重な御意見や体験やぜひとも誇らしい埼玉を国内だけでなく、東京オリンピックに行ったら、どこへ行きたい、埼玉に行きたいと言ってもらえる、まずそういう目標でよろしいわけですね。

皆様のとうといお力も御意見もいただきながら、素晴らしい埼玉、おもてなしの埼玉をつくっていきたいと思います。

今日は壇上には、改めまして申し上げますが、島田 始先生、本当にありがとうございました。皆様、長い時間にわたりまして御参加くださりましてありがとうございました。

以上で本日のプログラムは終了いたしました。

皆様本日は大変お忙しい中、また雪の中、御参加くださりましてありがとうございました。

